

駆け引きラヴァーズ

# 一

真冬の凍てつく冷気が、身に染みる。今夜は、特に冷え込みが厳しいようだ。少し立ち止まつただけで、足先がじんじんしてくる。

早く家に帰つて、暖房の効いた部屋でかじかむ手足を伸ばしたい……

インテリアデザイン会社で働く高遠菜緒は、夜も更けて人通りの少なくなつた路地を小走りで自宅へ向かっていた。そして、一人暮らしをしているワンルームマンションのエントランスに入る。郵便受けを確認するのも億劫<sup>おっくう</sup>で、真つすぐエレベーターに乗り込む。目的の階に停まると、軀<sup>からだ</sup>を縮こまらせ、いそいそと共用廊下を進んだ。

今日はバレンタイン。恋人のいる同僚たちは就業時間内に仕事を終えると、我先にと会社をあとにした。彼氏のいない菜緒は当然早く帰る必要はなかつたが、早々に帰宅することに決めた。

上司はまだ残業していたので多少気が引けたものの、義理チョコを渡した時「今日はバレンタインですか。それで皆、妙にそわそわしていたんですね」と言つてくれたので、菜緒が早く帰つても特に何も思わないだろう。

そうして会社を出たところで、同期から電話が入つた。女子会の誘いだ。断るのも悪いと、待ち

合わせのレストランへ行つたのだが、店員に案内されて入つた個室には、バレンタイン合コンがセッティングされていた。

「人数合わせだつたとしても、合コンは嫌いだつて、言つてたのに……」

彼氏が欲しくないわけではない。今年で二十六歳になるし、恋人と楽しそうにしている友人たちを見るたびに羨ましくなる。そう思いはするものの、恋人を探すために合コンへ参加するのは少し違う気がして、心が躍らなかつた。夢を見ているわけではないが、やはり自然の出会いがない。

自宅マンションの共用廊下を歩きながら、菜緒は力なくため息をついて眼鏡をはずした。酷く痛む目頭を冷たい指で揉む。普段はコンタクトをしているが、アルコールと人に酔つたせいで目の奥が痛くなり、レストランで眼鏡に替えたのだ。ただ、眼鏡は菜緒には合わず、コンタクトより目が疲れてしまう。今もその影響を受けていた。だから、眼鏡をかけるのは嫌いだつた。

さらに強く瞼の上を押した時、どこかのドアの開く音が聞こえた。顔を上げると、数戸先のドアから人影が覗いている。輪郭はボヤけていても、そこに立つ女性が誰なのかはわかつた。

「律子さん！」

「菜緒ちゃん、お帰り！」

彼女は、五十嵐律子。独身生活を満喫している三十七歳で、モデルのように美人なキャリアウーマンだ。商社マンの恰好いい彼氏もいる。

ただ、その彼氏はかなり嫉妬深いが……

五十嵐は仕事で全国を飛び回つてるので、隣人とはいえないなかなが菜緒と会う機会はない。にもかかわらず、一年前に引っ越してきた菜緒が彼女に挨拶をして以来、何故か意気投合。まるで菜緒を実の妹みたいに可愛がつてくれていた。そんな彼女と久しぶりに会えた嬉しさで、菜緒の頬は自然と緩んだ。五十嵐のもとへ向かう足取りも軽くなる。彼女も、菜緒の方へ歩み寄ってきた。

「律子さん、どうされたんですか？ 今日はバレンタインなのに、彼氏さんは？」

「実は出張中の。独りで寂しかつたから、仲のいい従弟を呼びつけて相手してもらつてたんだけど、二人だと全然面白くなくて……。それで菜緒ちゃんの帰りを待つてたんだ。ねえ、うちに寄つてよ。従弟を紹介したいし」

「えっ？ 今からですか!?」

正確な時間はわからないが、レストランを出た時間から考えると、既に二十三時近くになつてゐるはずだ。遅い時間であつても二人の間ではなんでもないが、彼女の従弟はどう思うだろう。さすがにちょっとまずいよね——と菜緒は申し出を断つとした。だがその前に、五十嵐が口を開く。

「いいじゃない、おいでよ！ あたしが言うのもあれだけど……、従弟、めっちゃくちやカツコイイよ」

五十嵐に手首を強く引っ張られた。手がかじかんでいたせいで、菜緒の手から眼鏡が落ちる。

「あっ！」

菜緒は息を呑み、ゆっくり視線を下げる。五十嵐の方へ引き寄せられて足を踏み出したそこには

眼鏡があり、それを思い切り踏ん付けていた。菜緒の眼鏡はフレームの形を変え、レンズははずれている。

「……嘘。ご、ごめん、菜緒ちゃん！ あたしが無理に引っ張ったせいだ。どうしよう！」

いつも何事にも動じず、おおらかに構えていた五十嵐が、動搖している。初めて見る彼女の様子がおかしくて、菜緒は小さく笑つた。

「気にしなくて大丈夫ですよ。普段はコンタクトなので、支障はありません。それに、その眼鏡の度数も合ってなかつたんです」

フレームを拾い上げた五十嵐が、申し訳なさそうに菜緒を窺つた。

「でもさ、やっぱりあるのとないのとでは違うでしょ？ ねえ、家に替えはある？」

「替えはありませんけど、家では普段眼鏡をかけていないので平気です。気にしないでくださいね」

実際はテレビやパソコンを見たり、雑誌を見たりする時は眼鏡が必要だ。でも、それはわざわざ言うことではない。

菜緒はなんでもないと笑みを浮かべ、五十嵐からぐにやりと曲がった眼鏡を受け取ると、ハンカチに包んでバッグに入れた。

「それじゃ、あたしの納得がいかない。弁償させて。一緒に買いに行く。……あつ、ダメだ。また出張でしばらく帰つて来られないんだつた。そうだ……従弟いとこを付き添わせる。そして、あいつに美味しいものを奢むらせる！」

「律子さん、本当に大丈夫です」

菜緒が頭を振つたその時、五十嵐の家のドアが大きく開いた。驚いてそちらへ目を向けると、背の高い人物が顔を覗かせていた。

「律子、何騒いでるんだ。いつまでも廊下に——」

男性の不機嫌そうな声。だが、その言葉は徐々に小さくなつていった。この距離では、菜緒は彼のボヤけた顔しか見ることができない。それでもモデル並みに背が高く、すらりとした体躯たいくをしていることがわかつた。そんな彼の目が、菜緒に向かっていると感じる。そう思つただけで、菜緒の胸が少しずつ高鳴り出した。社会人になつて初めて我が身に起きた反応に驚きつつも、彼のボヤけた姿に見惚れてしまう。菜緒がじつと立ち尽くしていると、五十嵐が苛立たしげに息をつき天あまを仰いだ。

「終生しゅうせ、いきなり出てこないでよ。せつかくあたしが……もう！」

五十嵐は地団駄じだんたを踏みそうな顔付きだったが、すぐに我に返つてにっこり笑い、菜緒の肩を抱いて顔を寄せた。

「紹介するね。彼女があたしの隣人で、実の妹のように可愛がつてゐる菜緒ちゃんです。可愛いですよ！ あたしの仔猫みどりちゃんなんだ」

ヘアアイロンで毛先を卷いてふんわりさせた菜緒のセミロングの髪に、五十嵐が頬をすり寄せる。こうやつて菜緒を可愛がつてくれるのは、五十嵐ぐらいだろう。

そもそも菜緒は引つ込み思案な性格で、人付き合いの上手い方ではなかつた。それなのに、心の

中では誰かに構つて欲しいという願望がある。それでいて、いざ近寄られると一步退き、相手との間に壁を作つて逃げてしまう。

まるで、むらつけのある仔猫の如く……

今日のバレンタイン合コンでもそうだった。参加していった男性に話しかけられて内心嬉しかったのに、積極的な気配を感じると話をはぐらかし、逃げるよう席を移動した。

そういう意味からすると、確かに菜緒は仔猫だろう。

五十嵐は本当に菜緒をよく見ている。ありのままの自分を受け入れてくれる彼女の存在に、菜緒はふっと頬を緩めた。すると、男性が玄関ドアを開け放したまま部屋の中へと引っ込んだ。

「彼女を誘うなら、俺は……帰る！」

部屋から、そんな声が聞こえてきた。

息を呑む菜緒の隣で、五十嵐が楽しそうに笑い出す。何故そこで笑うのかわからず、おろおろしていると、彼女に頭をポンポンと優しく叩かれた。

「ごめんね、態度が悪くて……。だけど柊生って、いい奴なの。実家を飛び出したあたしを、彼だけがずっと心配してくれててね。あいつの方が多いろいろ大変なのに……」

五十嵐が実家を飛び出した理由は、ほんの少しだけ聞いていた。当時付き合っていた彼氏と別れるために、親から政略結婚をさせられそうになつたという。いつの時代のお嬢様だと思つたが、彼女の悲しそうな顔を見て嘘ではないとわかつた。その彼氏とは結局別れたそうだが、両親の言いなりにはならないと、彼女は今も頑張つてている。

そんな五十嵐を、ずっと従弟の彼が支えてくれてたんだ……

初対面の菜緒に対する態度はいかがなものかと思うが、その話を聞いて彼の印象が変わつた。従姉を思いやる優しさを持つてゐる男性だと思うと、不意に彼に興味が湧いてくる。

彼の方がいろいろ大変つて、何かあつたんですか？——そう訊ねそうになつて、言葉を呑み込んだ。五十嵐とは親しく付き合つてゐるが、彼女の従弟とはまだ会つたばかりだ。興味本位でいろいろ訊いてもいい問柄ではない。

「あの、今日はお邪魔するのを止めておきますね」

菜緒は苦笑いを浮かべつつバッグに手を突っ込み、鍵を取ろうとした。だがそうする前に、五十嵐に腕をがつちり掴まれる。

「何を言つてるの？ 柊生はね……ちょっと……ううん、菜緒ちゃんを見てかなり驚いてしまつただけ。そして今、どうしようかとあたふたしてるの」

肩口を揺らして楽しそうにする五十嵐に引つ張られる。躊躇つて転びそうになるが、足を踏ん張つて背の高い彼女を見上げた。

「律子さん！ わたし、今夜は本当に遠慮します。明日も仕事ですし——」

「ダメよ。こんな機会、もう二度とないかもしれないのよ！ しかも、今日はバレンタイン。ふつ……素敵なことが起こりそうね」

五十嵐は開け放たれたままのドアの中に、菜緒を引き入れた。

「柊生！ 菜緒ちゃんを連れて来たよ！」

五十嵐の部屋には何度も入っているし、家具の配置も熟知している。裸眼のせいで視界はボヤけているが、奥の部屋にあるソファの上で黒い塊かたまりが動いたのはわかつた。

「じゃ、俺がここにいる必要ないな。帰る——」

「実は菜緒ちゃん、今コンタクトしてないの。しかも、ついさっきあたしが彼女の眼鏡を壊しちやつた。あたしの部屋には何度も入ってるから大丈夫だとは思うけど、細かいところは見えないみたい。柊生も気を付けてあげてね」

さあ、部屋に入つて——と五十嵐に背中を押されて、菜緒は心を決めた。ブーツを脱ぎ、彼の機嫌を窺うかがいながら部屋の奥へ進む。だが、キツチンを通り過ぎたところで菜緒の足が止まつた。室内から漂う肌をざわつかせる空氣に、それ以上進めなくなつてしまふ。そんな菜緒の肩に、彼女が両手を置く。

「改めて紹介するね。柊生、彼女は隣人の菜緒ちゃん、二十五歳。インテリアデザイン会社で働いてます。彼はあたしの従弟いとこの柊生。年齢は三十二歳で……なんと彼も菜緒ちゃんと同じインテリア——」

「おい！」

急に柊生が口を挟んだ。じろりと五十嵐を睨的み付けているのが雰囲氣で伝わつてくる。だが、彼女は楽しそうにつっこりしていた。

「何よ、別にいいじゃない。柊生もインテリア関係の仕事に就いているつて言つても」

「柊生さんも、インテリア関係のお仕事をされてるんですか!?」

菜緒は思わず訊きくと、柊生は言い辛そうに「ああ」とだけ答え、ふいつと顔を背けた。  
「あらら、拗すねちやつた」

「わたしのせいですね。すみません……」

五十嵐の従弟だからこそ、彼にはいい印象を持つてもらいたいと思つたが、上手くいかなかつた。しゅんと肩を落とす菜緒の背中を、彼女が優しく撫でる。

「違うよ。柊生はあたしに腹を立てていてるの。菜緒ちゃんは全然悪くないからね。さてと、お酒の準備しなきや！ さあ、座つて待つて。柊生、菜緒ちゃんをいじめないでね！」

「あの、失礼します」

菜緒はコートを脱ぎ、白のハイネックセーターとボックスプリーツ型のスカート姿になる。ソファに座る柊生からは一番遠い、ローテーブルを挟んだ向かい側へ行き、そして座つた。だが、下手に話しかけて彼を怒らせたくない菜緒は、軀からだを縮こまらせて顔を伏せる。

「なあ、……本当にボヤけて見えないのか？ ……俺の顔も？」

柊生の冷たい声音に身震いしたが、菜緒は彼をそつと窺つた。彼は自分の顔の前で手をゆっくり動かし、菜緒の目がそれを追えるか試している。緊張していたはずなのに、彼の態度がおかしくて、菜緒はふつと噴き出した。

「ごめんなさい。えつと……まったく見えないというわけではないんです。カメラのピントが合っていないと言えばわかりますか？ 全体がボヤけているだけなので、あの……柊生さんが顔を動かしたり、手を上げたりしているのはわかります」

「そう、なんだ……」

何故か、彼はホッとしたようだ。でもそのまま顎に手をあて、何かを考え込み始めた。しかも、苛立たしげに大きなため息までつく。

菜緒が変なことを言つたのだろうか。思わず笑つてしまつたのがいけなかつた？ それとも、菜緒が柊生から一番遠い場所に座つたせい？

「あ、あの！ 実は、もつと近づけば顔もよく見えるんです。ただ、相手の顔が見えそうで見えない距離にいるとまじまじ見てしまう癖があるので、このくらいの距離でいさせてください！」

菜緒は、必死に言い訳した。途端、柊生が大声で笑い出す。楽しそうに肩を揺らして俯いたと思つたら、顔を上げ、上目遣いで菜緒を見る。菜緒にははつきりと柊生が見えているわけではないのに、どうして興味深げに見られていると感じるのだろう。

「あら、柊生が笑つてる。そうよね、安心すれば誰だつて——」

「律子、お前……ずっと知つてたんだな」

「さあ……」

二人が何のやり取りをしているのかさっぱりわからない。だが、五十嵐と柊生の楽しげな雰囲気がこちらに伝わってきて、菜緒の肩に入つっていた力がゆっくり抜けていった。

「明日は仕事だけど、今日は特別つてことで。いっぱい飲んでね」

五十嵐はローテーブルにお鉢子を置いた。さらにきんびらごぼうや揚げ出し豆腐、糸こんにゃくの明太子和えといった酒の肴も置く。そして、菜緒の斜め前に腰を下ろす。

「わあ！ わたしの大好きな、律子さんのきんびらごぼう！ 作つてくれたんですか？」

菜緒が歓声を上げると、五十嵐はにつこりした。

「もちろん！ 菜緒ちゃん、いつも美味しいって食べててくれるからね。それに比べて、柊生つたら、これまで一度も美味しいって言ってくれないんだよね」

「へえ……、律子がそういう風に言われたがつてているとは知らなかつたな」

「その考えがダメなんだつて、いつも言つてるでしょ。本当、女心を理解できない男」

五十嵐はお鉢子を持ち、菜緒と柊生の杯にお酌をする。続いてお鉢子を受け取つた彼は、腰を浮かして前屈みになり、五十嵐の杯に注いだ。

柊生との距離が縮んだせいで、男らしいムスク系の香りが菜緒の鼻腔をくすぐる。思わず彼に目を向けた瞬間、菜緒の心臓がドキッと高鳴った。輪郭がほんの少しだけ鮮明になり、その雰囲気から彼が人を惹き付ける魅力のある男性だとわかつたからだ。

長めのウルフカットの黒髪を無造作に搔き上げるだけで、柊生の野性的な男の色香が漂つてくる。お鉢子を持つごつごつした骨ばつた手、太い首、男らしい喉仏が陰影で上下に動く様子にさえ目を奪われる。

柊生の顔をじつと見つめていると、彼がいきなり菜緒に視線を向ける。

「おい、人をまじまじと見ないために俺から離れたつて言つてたくせに、話が違うだろ」

柊生は菜緒の方へ手を伸ばすと、額を指で弾いた。

「痛つ！」

叩かれた額に手を置いて顔を上げた時には、彼は既にソファに座り直して距離を取っていた。再びその姿がボヤけるが、彼が顔をしかめているように感じる。

「落ち着いてよ、柊生。顔がはつきり見えないんだもの。気になるのも仕方ないじやない。それより、乾杯しようよ。あたしの大好きな菜緒ちゃんを柊生に紹介できたことに、乾杯！」

「……乾杯」

そんな音頭でいいのかと思いつつも、菜緒は五十嵐に合わせて杯を上げ、グイッと飲んだ。食道が燃えるように熱くなり、冷えた臓器を温めていく。フルーティでありながらさっぱりした後口に、菜緒は満足の声を漏らした。

柊生は明らかに乾杯する気分ではないようだが、しばらくすると小声で「乾杯」と言つて杯を口元へ運んだ。五十嵐はににこにこしながら、酒の肴を食べては日本酒を飲む。

「そういえば、菜緒ちゃんはどこへ行つてたの？」もしかして、デートじゃないわよね？」

話を振られた菜緒は杯をテーブルに置き、空になつた五十嵐の杯に酒を注いだ。

「違います。社会人になって以降、彼氏なんてずっとといなつて知つてるじやありませんか」

「うん、だからね……、菜緒ちゃんに柊生を紹介したんだけど」

「おい！」

しつとと言う五十嵐にすかさず彼が口を挟むが、彼女は気にする様子もない。上体を倒し、菜緒に顔を寄せてきた。

「それで？」

「あつ……えつと——」

菜緒は、バレンタイン合コンに参加していた話をしようとした。その時、先ほどまでそっぽを向いて杯を傾けていた柊生が、いつの間にか菜緒を窺つ正在中していると気付き、出かかった言葉を呑み込む。こつちに来るなど線を引かれたはずなのに、意識を向けてもらえると思つただけで嬉しくなつてしまつた。菜緒の口元は自然とほころぶが、すぐに奥歯を噛み締めて、唇を引き結んだ。

柊生が菜緒を見ているのは、ただ単に、話をしている人に目を向けただけだろう。

こんなに男らしくて素敵な人が、わたしなんかに興味を持つはずないもの——自嘲気味に小さく笑つて、菜緒は五十嵐に目を向けた。

「実は、バレンタイン合コンに参加してました」

「ええ!? 何それ！ 菜緒ちゃん、そういうのは嫌いって言つてたじやないの！」

「律子がやつてると、一緒だと思うけどな」

五十嵐はキッと柊生を睨み、菜緒に詰め寄る。

「それで？ どうなつたの!？」

「何も……です。そもそも、合コンとは知らずに呼ばれて……。うん、義理参加です」

「良かった！ たとえ義理とは言え……いい人はいなかつたつてことだもんね？」

いつの間にか腰を浮かして前のめりになつていた五十嵐が、ホツと胸を撫で下ろして座り直した。

「凄くしつこい人もいましたけど、わたしは逃げちゃいました」

「彼氏、欲しいんだ？」

会話に、柊生が割つて入つてくる。彼は片肘を膝に置いて前屈みになり、杯を傾けながら菜緒に面を向けていた。

「そう、ですね。とは言つても、誰でもいいわけじゃないです。出会い系の場も大切だとは思うけど……こう、自然な出会いの中で、会つた瞬間に胸をときめかせられたらというか」

「少女趣味……」

柊生の呟きに、菜緒の軀が羞恥でカーッと熱くなつた。彼に言われなくとも、菜緒自身恋に幻想を抱いているのはわかっている。でも、どんな人と出会つても心が弾まない。素敵な人と出会つても、何故か皆良い人で終わつてしまふ。だから、出会つた瞬間に胸がドキッとするような出会い系をしたかった。

そして今、妙に菜緒の心をざわつかせる男性が目の前にいる。しかし、柊生は菜緒をあまり意識していないようだ。

きっと五十嵐の可愛がる隣人だから、仕方なく付き合つてているという感じだろう。  
少し悲しいかな……

小さくため息をついた時、五十嵐が菜緒の肩を抱いてきた。

「柊生の言葉なんて気にしちゃダメ。あいつの周囲にいる女性つて、なんて言つか……計算高い女しかいないの。だけど、打算で男を作らない子もいるんだと知つて、今新鮮な気持ちになつてているんだと思う。だよね、柊生？」

「へえ、律子は俺の気持ちがわかるのか……」

抑揚のない、棒読み口調で言う柊生。なのに五十嵐は何故か上機嫌になる。

「やつぱり菜緒ちゃんを柊生に紹介して良かった！」

アルコールでほんのり頬を染める五十嵐は、空になつてゐる菜緒の杯にお酌しゃくをし、自分の杯には手酌でたつぶり注いだ。

「柊生にはね、菜緒ちゃんのように純粹な女性もいるんだって知つて欲しかったんだ。まあ、本人が自暴自棄になつて荒れた生活を送つてるから、そういう女性と出会うのは無理だつたんだけどね」

「あの……わたし、純粹ですか？ 知つてのとおり、結構ややこしい性格をしていますけど」

真剣に訊ねる菜緒に、五十嵐は優しげに微笑んだ。

「菜緒ちゃんはさ、あたしの周りにいたどの女性とも全然違う。それがあたしをホツとさせてくれるの。心を隠さず、真つすぐな気持ちで向き合つてくれる菜緒ちゃんの存在に助けられてる。だからね、あたしはそういう菜緒ちゃんを柊生に紹介したいって思つたんだ」

「はいはい……」

柊生は氣怠けだるげではあるものの、五十嵐の言葉にきちんと受け答えをしている。たつた一言だが、柊生が従姉いいじを大切に扱つてゐるのが伝わつてきた。

「ああ、やつぱりこういう男性つていいな……」

「もう！ せつぱり菜緒ちゃんを紹介したつていうのに、その言い草は何よ！ でもまあ……いつか。これでお互い顔見知りになつたわけだし」

楽しそうに笑うと、五十嵐は話題を変え、出張の話を始めた。警戒心を解いてきた柊生も話に加わり、ほんの少しだけ二人の仲間に入れたかなと、菜緒の頬が緩む。

その時、室内にチャイム音が響いた。マンションのエントランスで押すチャイムの音だ。

「うん？……誰も来る予定なんてないんだけど」

五十嵐が立ち上がるが、酔いが回つて足元がおぼつかない。

「律子さん！」

菜緒は反射的に立ち上がり、五十嵐の軀からだを支えた。

「わたしが、見ましようか？」

「いや、俺が見てこよう」

柊生がソファを立ち上がる。だが、五十嵐が「大丈夫だから」と、彼を制した。そうしている間にも、チャイム音は鳴り響く。

「二人とも座つて待つて」

五十嵐がにつこりして歩き出すが、やはり足元はふらついていた。

「はいはーい、誰かな？」

呂律は回っているので大丈夫だろう。そうは思うものの、菜緒は迷っていた。五十嵐が足を躊躇つまむかせたら助けられるよう傍へ行くべきか、それとも言われたとおり座つて待つべきかとおろおろする。やつぱり彼女を支えようと決めた時、柊生に「おい」と声をかけられた。

「座つてれば？」律子が大丈夫って言つてるんだ。そんなに心配する必要もないだろ？」

菜緒は頭を振った。

「律子さん、素直に人に頼るような性格じやないから……。そういう時に限つて、言葉と態度で強気に振る舞う癖があるんです。だから、もし律子さんのそういう姿を目にしたら、わたしが彼女の助けになりたいと思つて……」

菜緒は、既にソファに腰を下ろしていた柊生の方に顔を向けた。一瞬、彼は呆気に取られたようだが、やがてゆっくり手で口元を覆い、菜緒から顔を背けた。

「あ……、なんか、この展開つてヤバイかも……」

「何もヤバくないですよ！」

「いや、そういう意味じや——」

柊生がそう言つた直後、五十嵐の「えつ？ ええつ！」と叫び声が響いた。菜緒はハツとして、ドアの傍に立つ彼女を見つめた。彼女は硬直して、モニター画面を見つめている。五十嵐のもとへ駆け寄ろうとした菜緒だが、一步踏み出したところで柊生に肩を掴まれた。

「菜緒はそこにいるんだ」

柊生の険のある声と、初めて呼び捨てにされたことに驚き、菜緒は真横に立つ彼を振り仰いだ。初めて間近で彼の顔を見て、ドキッとした。くつきりとした二重の目、鋭い光を宿す双眸そつぼう、真っすぐな鼻梁ばりょう、そして色っぽい唇。見覚えはないのに、どこかで彼に会つたような感覚に襲われる。

こんな、芸能人並みに霸氣の漲る男性と出会つていれば、覚えているはずなのに……

ボーッと柊生の顔を眺めていると、彼が菜緒の背中を軽く叩いた。

「いいか、動くなよ」

柊生は菜緒に背を向け、早足で五十嵐の傍へ寄る。

「律子、どうした？……あつ！」

モニター画面を見るなり、柊生が身を翻してソファへ戻ってきた。彼は菜緒には目も向げず、部屋の隅にかけてあつた黒いダウンジャケットを掴む。

「えつ？」

柊生の行動に驚きつつ律子に目を向けると、彼女がモニター画面の応答ボタンを押したところだつた。

「ご、ごめん。ちょっとバタバタしてて。あの、今日は来られないって言つてたのにどうしたの？あたし、びっくりしちゃった。あつ、えつと……そんなことないって。今、開ける……」

そう言つてボタンから手を離した途端、五十嵐がすぐに振り返つた。

「彼氏が来た！もうなんなのよ……。出張だつて言つてたのに！」

五十嵐の言葉に、菜緒は柊生を見た。彼はセーターの上にダウンジャケットを羽織り、真っ先に玄関へ向かう。五十嵐が彼を追い、菜緒もあとに続いた。柊生はオイルレザーのウエスタンショートブーツを履いてドアを開ける。だが、静かな廊下にエレベーターが到着する音が聞こえると、俊敏にドアを閉めた。

「駄目だ、逃げられない！」

柊生の言葉に、菜緒は急いで部屋へ戻つた。ソファの隅に置いてある籠で編まれた小さな籠を引

き寄せ、そこに彼が使つていた食器を入れる。ブーツを脱いで部屋へ戻つてきた彼にそれを渡すと、柊生は何も言わずに受け取つた。

柊生は知つているのだ。五十嵐の恋人が極端に嫉妬深いのを……

顔を上げると、菜緒を見ていた柊生が頷いた。菜緒が何も言わなくとも心が通じる感覺に、胸が躍り始める。

今はそんな風に感じていて余裕はまつたくないのに……

「嫉妬さえなれば、本当にいい奴なのに！」

「だから何回も言つているだろ。律子が浮気するかもしれないと疑う男なんて、さつさと切れつて」

「今は、その話はいいから」

言い争いを始めたが、すぐに柊生が我に返つて口を噤んだ。

「あの、これからどうします？わたしはいいとして、柊生さんは……」

菜緒は柊生を見る。彼がイライラしているのは、肌で十分感じられた。彼も気が気がしないのだろう。

五十嵐の彼氏は、普通に人付き合いのいい素敵な男性で、彼女をとても大切にしている。ただ、かなり嫉妬深い。裏を返せば、恋人を愛しているという意味なのかもしれないが、それは度を超えていた。

彼は、たとえ親族であつても、彼女の部屋に男性が入るのを許さない。会う必要があるなら、人

の目のある公共の場でと強く言われているらしい。

なのに、彼女は、従弟の柊生を部屋に上げている。もし現場を見られでもしたら、いつたいどうなるだろう。

五十嵐の彼氏は、菜緒が一緒にいたと知つても納得しないに違いない。そういう男性なのだ。

「と、とりあえず、柊生はベランダに隠れて——」

五十嵐がそこまで言つて、菜緒に顔を向ける。

「ねえ……。菜緒ちゃんとのベランダとうちのベランダってつながつてたよね？ 柊生をそつちのベランダへ行かせるから、菜緒ちゃんの家でちょっととの間だけ、置つてくれない？」

「えっ？ わたしの家、ですか！？」

「お願い！」

五十嵐が顔の前で手を合わせ、頭を下げる。こんな風に頼まれたらイエスと言いたくなるが、さすがに柊生を一人暮らしの部屋へ入れるのは躊躇してしまう。五十嵐が従弟に信頼を寄せているのは知つても、菜緒にとつては今日会つたばかりの男性。そんな彼を家へ招き入れるなんて、無理だ。

「あ、あの……」

菜緒の声が自然と強張る。すると、顔の前で手を合わせていた五十嵐は、手を静かに下ろした。

「菜緒ちゃん——」

その時、玄関のチャイム音が部屋に響いた。さつと二人が真顔で目を合わせる。

「律子。こうなつたら、俺が彼氏の嫉妬を全面的に受け入れてやる。それでもし、俺が殴られて歯が折れたら、お前に請求書を送るからな」

「柊生……、うん、わかった」

自分の恋人が乱暴な振る舞いをする可能性を堂々と認める彼女に、柊生は呆れ顔で小さく笑つた。

「容赦ないな。でも、まあ……こうなることは、俺も予想するべきだった」

「ごめん……、ごめんね柊生」

「わかってる。それほど律子が好きつてことだろ。俺はあそこまで誰かを好きになつた経験がないから……；彼の行動は理解できないが」

「柊生が本気の恋をしたらどうなるか、ちょっと見物だね」

五十嵐は力のない小さな声で笑つた。その後は何も言わなかつたが、再度チャイム音が部屋に響くと、菜緒たちに背を向けて玄関へ歩き出した。

本当にこれでいいのだろうか。彼女だけでなく柊生も、菜緒を責めない。それどころか、彼は、従姉の彼氏に殴られる覚悟を決めた。

菜緒だけが逃げようとしている。これでは、いつもと変わらない。怖気づいては逃げ、それでいてあとで悩むのはもう嫌だ。

前を向きたい。大切な友人の助けになりたい！

「来てください！」

ここにきて初めて、菜緒は自分の意思で柊生の腕を掴んだ。

「おい？ ……菜緒？」

「菜緒ちゃん？」

玄関に行きかけていた五十嵐が踵を返してくるのが、目の端に映る。だが、菜緒は柊生だけに意識を向けた。

ベランダへ出るガラスドアを開け、柊生をそこへ押しやる。

「ここから隣のベランダへ行つてください。わたし、部屋に戻つたら鍵を開けますから！」

小声でしつかり伝えると、柊生が菜緒に手を伸ばした。大きな無骨な指で、頬を撫でられる。

「…………ありがとう」

柊生の仕草にドキッとした。男性に慣れていないため、触れられたら反射的に逃げる癖があるのに、彼から目を逸らせない。ボヤけていない彼の顔を見たいという衝動に駆られる。

「じゃ、向こうで待ってる」

名残惜しげに柊生の手が離れる。彼は菜緒に背を向け、隣のベランダとの境目ににある間仕切りのパーテイションへ向かう。そして膝を折り、手にしていた籠を置いた。

「菜緒ちゃん？ 本当にいいの？」

五十嵐の声に我に返り、菜緒はベランダのガラスドアを閉める。

「はい。律子さんが柊生さんを信頼しているのはちゃんとわかりました。最初は尻込みをしてしまったけど……律子さんを、彼を助けたいって、わたしが思つたんです」

「そつか……。ありがとうございます。なんか、嬉しいな。あのね、柊生はふつきらぼうで、愛想も良くない

けど、根は優しい、とてもいい奴だから」

菜緒のコートとバッグを掴んだ五十嵐が、菜緒の手にそれを渡す。

「とは言つても、あいつだつて立派な男、野獣。もし、菜緒ちゃんの意思に反して、柊生が変な真似でもしそうになつたら思い切り殴つていいからね。あたしが許す！」

五十嵐の言葉に、菜緒は「はい」と微笑んで頷いた。

「よし！ じゃ……よろしくお願ひします」

二人で玄関へ向かい、五十嵐が玄関の鍵を開けた。

「なんでドアを開けるのに、こんなに時間がかかるって——」

五十嵐の彼氏は強い口調で問い合わせたが、菜緒を見て言葉を呑み込む。

「君はお隣の……えっと、高遠さん？ 律子の部屋に來ていたんですか？」

「こんばんは。遅い時間なのに、お邪魔していました。律子さんが……わたしのために出張先でいろいろ仕事着を買つてくれたので……試着させてもらつていたんです」

アパレル関係の仕事に就く五十嵐は、出張先で菜緒によく服を買つてくれる。その時は彼女の家で試着するので、これは嘘ではない。

今日は全然違うが……

「菜緒ちゃん、またしばらく出張で家を空けるけど、帰つてきたら遊びようね」

「あつ……はい！ わたしに似合う服があつたら、またお願ひします」

五十嵐に告げると、菜緒は彼女の彼氏と入れ替わつて共用廊下へ出た。彼女の玄関ドアが閉まる

とバッグからキークースを取り出し、家の鍵を開けて乱暴にドアを閉める。コートとバッグを放り投げ、電気を点ける間も惜しんで窓辺に駆け寄り、ベランダの鍵を開けて外へ出た。

「柊生さん！」

小声で柊生の名を呼ぶが、ベランダに彼の姿は見当たらない。もしかしてベランダの手すりを乗り越える時に足を滑らせたのではと心配になり、菜緒は慌てて手すりから身を乗り出した。だが、眼鏡すらかけていない菜緒に、彼の姿なんて見えるはずもない。

恐怖で躯<sup>からだ</sup>が震えたその時、何か目の端<sup>はし</sup>で黒い物体が動いた。

「な、何!?」

菜緒は驚きつつも、パーテイションへ近づく。物置の傍で動くその物体の傍らには、柊生の着ていたダウンジャケットがあった。さらに顔を寄せて初めて、彼が菜緒に足を向ける形でベランダに這いつくばっていると気付いた。

「しゅ、柊生さん？ あの、大丈夫ですか!?」

菜緒は柊生の足元にしゃがみ込み、恐る恐る手を伸ばして彼の足に触れた。

「……っ！」

柊生は、菜緒に返事すらしない。ただ、何かをしながら苦しそうな息を零<sup>こぼ</sup>している。どうすればいいのかとおろおろしていると、彼は躯をゆっくり後退させ始めた。

かすかに食器のぶつかり合う音が響く。上体を起こした時、柊生の手には食器の入った籠<sup>かご</sup>があつた。

それは、菜緒が彼に渡したものだ。確かに彼は、籠をパーテイションの傍に置いていたはず。だが、無理な体勢でそれをこちら側へ引き入れたところを見ると、スマーズに持つてこられなかつたのだろう。

「……悪い。少し、手間取つた——」

「おい、これは男の残り香じゃないのか？ ……もしかしてこの部屋に誰か男を連れ込んでたんじゃないだろうな？ おい、何故、そんなにベランダを気にしているんだ？ もしや、ベランダに!?」

ベランダに近い場所で声を上げているせいか、隣室の話し声がはつきり耳に届いてきた。しかも、五十嵐の彼氏はベランダに意識を向けている。このままここに座り込んでいるのは良くない。この場を立ち去ろうと、菜緒は柊生の腕を掴んで部屋に促そうとするが、一足遅かつた。

「ちよつと！」

ベランダの鍵を開ける音が聞こえた。ハツと息を呑む菜緒の前で、柊生は手にしていた籠を脇へ押しやる。そして菜緒に手を伸ばし、いきなり抱きついてきた。びっくりした菜緒は、思わず上体を退いてしまう。それがいけなかつた。

柊生の勢いも重なり、菜緒はそのまま彼と一緒に後ろへ倒れてしまつた。

「悪い！」

「い、いえ……」

柊生に覆いかぶさられる体勢にどう反応すればいいのかわからず、声が詰まる。なのに彼の重み

と温もり、熱い吐息を受け、菜緒の艶の芯がじんわりとした熱を持ち始めた。心臓が早鐘を打ち、呼氣のリズムも乱れていく。

「……菜緒つて、意外と——」

柊生が何かを言いかけたと同時に、隣のベランダのガラスドアが開く音が響いた。

「誰かいるのか!?」

「いないって……。ほらっ、誰も……」

「いや、確かに何か音がした」

「あっ、ちょっと、何考えてるの？ そつちは菜緒ちゃんの！」

「何言ってるんだ。もし強盗とかだつたらどうするんだよ。……えつ？ 律子、高遠さんが男に！」

「男!? ちょっとそこ退いて！ ……あらら。菜緒ちゃんつてば、彼氏が来てたんだね。それで、早く家に帰りたくてうずうずしてたんだ」

彼氏？ 早く家に帰りたい？

最初こそ何を話しているのかわからなかつたが、すぐに五十嵐がこの光景を利用しようとしている

と気付いた。おずおずと手を動かして、柊生の背に腕を回す。

「ご、ごめんなさい、律子さん。その、素直に言えなくて……」

柊生は五十嵐たちに背を向けたまま軽く腰を起こし、腰を上げた。そして、菜緒を引っ張り立たせて

早く家に帰るための手配を始めた。

「彼氏？ 早く家に帰りたい？」

「あっ、ちょっとそこ退いて！ ……あらら。菜緒ちゃんつてば、彼氏が来てたんだね。それで、

早く家に帰りたくてうずうずしてたんだ」

彼氏？ 早く家に帰りたい？

最初こそ何を話しているのかわからなかつたが、すぐに五十嵐がこの光景を利用しようとしている

と気付いた。おずおずと手を動かして、柊生の背に腕を回す。

「ご、ごめんなさい、律子さん。その、素直に言えなくて……」

柊生は五十嵐たちに背を向けたまま軽く腰を起こし、腰を上げた。そして、菜緒を引っ張り立たせて

早く家に帰るための手配を始めた。

「彼氏？ 早く家に帰りたい？」

「あっ、ちょっとそこ退いて！ ……あらら。菜緒ちゃんつてば、彼氏が来てたんだね。それで、

早く家に帰りたくてうずうずしてたんだ」

彼氏？ 早く家に帰りたい？

最初こそ何を話しているのかわからなかつたが、すぐに五十嵐がこの光景を利用しようとしている

と気付いた。おずおずと手を動かして、柊生の背に腕を回す。

「ご、ごめんなさい、律子さん。その、素直に言えなくて……」

柊生は五十嵐たちに背を向けたまま軽く腰を起こし、腰を上げた。そして、菜緒を引っ張り立たせて

早く家に帰るための手配を始めた。

「彼氏？ 早く家に帰りたい？」

「あっ、ちょっとそこ退いて！ ……あらら。菜緒ちゃんつてば、彼氏が来てたんだね。それで、

早く家に帰りたくてうずうずしてたんだ」

彼氏？ 早く家に帰りたい？

最初こそ何を話しているのかわからなかつたが、すぐに五十嵐がこの光景を利用しようとしている

と気付いた。おずおずと手を動かして、柊生の背に腕を回す。

「ご、ごめんなさい、律子さん。その、素直に言えなくて……」

柊生は五十嵐たちに背を向けたまま軽く腰を起こし、腰を上げた。そして、菜緒を引っ張り立たせて

早く家に帰るための手配を始めた。

「彼氏？ 早く家に帰りたい？」

「あっ、ちょっとそこ退いて！ ……あらら。菜緒ちゃんつてば、彼氏が来てたんだね。それで、

早く家に帰りたくてうずうずしてたんだ」

彼氏？ 早く家に帰りたい？

最初こそ何を話しているのかわからなかつたが、すぐに五十嵐がこの光景を利用しようとしている

と気付いた。おずおずと手を動かして、柊生の背に腕を回す。

「ご、ごめんなさい、律子さん。その、素直に言えなくて……」

柊生は五十嵐たちに背を向けたまま軽く腰を起こし、腰を上げた。そして、菜緒を引っ張り立たせて

早く家に帰るための手配を始めた。

「彼氏？ 早く家に帰りたい？」

「あっ、ちょっとそこ退いて！ ……あらら。菜緒ちゃんつてば、彼氏が来てたんだね。それで、

早く家に帰りたくてうずうずしてたんだ」

彼氏？ 早く家に帰りたい？

最初こそ何を話しているのかわからなかつたが、すぐに五十嵐がこの光景を利用しようとしている

と気付いた。おずおずと手を動かして、柊生の背に腕を回す。

「ご、ごめんなさい、律子さん。その、素直に言えなくて……」

柊生は五十嵐たちに背を向けたまま軽く腰を起こし、腰を上げた。そして、菜緒を引っ張り立たせて

早く家に帰るための手配を始めた。

「彼氏？ 早く家に帰りたい？」

「あっ、ちょっとそこ退いて！ ……あらら。菜緒ちゃんつてば、彼氏が来てたんだね。それで、

早く家に帰りたくてうずうずしてたんだ」

彼氏？ 早く家に帰りたい？

最初こそ何を話しているのかわからなかつたが、すぐに五十嵐がこの光景を利用しようとしている

と気付いた。おずおずと手を動かして、柊生の背に腕を回す。

「ご、ごめんなさい、律子さん。その、素直に言えなくて……」

柊生は五十嵐たちに背を向けたまま軽く腰を起こし、腰を上げた。そして、菜緒を引っ張り立たせて

早く家に帰るための手配を始めた。

「彼氏？ 早く家に帰りたい？」

「あっ、ちょっとそこ退いて！ ……あらら。菜緒ちゃんつてば、彼氏が来てたんだね。それで、

早く家に帰りたくてうずうずしてたんだ」

彼氏？ 早く家に帰りたい？

最初こそ何を話しているのかわからなかつたが、すぐに五十嵐がこの光景を利用しようとしている

と気付いた。おずおずと手を動かして、柊生の背に腕を回す。

「ご、ごめんなさい、律子さん。その、素直に言えなくて……」

柊生は五十嵐たちに背を向けたまま軽く腰を起こし、腰を上げた。そして、菜緒を引っ張り立たせて

早く家に帰るための手配を始めた。

「彼氏？ 早く家に帰りたい？」

「あっ、ちょっとそこ退いて！ ……あらら。菜緒ちゃんつてば、彼氏が来てたんだね。それで、

早く家に帰りたくてうずうずしてたんだ」

彼氏？ 早く家に帰りたい？

「悪い……」

柊生が菜緒に囁いた。何がと問う前に、彼の湿り気を帯びた吐息が唇に触れた。そこで初めて、彼が距離を縮めてきたのがわかつた。

「柊生さ……っんう！」

顔を傾けた柊生に唇を奪われる。彼は優しく唇を動かし、ついばみ、宥めでは、柔らかな菜緒の唇に舌を這わせた。軽く触れ合わせるキスではない。まるで愛しいと言わんばかりの口づけに、周囲の雑音が消えていく。

菜緒の下腹部奥が、じんわり熱を持ち始める。いつの間にか柊生を深く受け止めるように、頸を上げていた。そんな菜緒の背に、柊生の腕が回される。さらにきつく引き寄せられると、彼の舌が差し込まれた。

「……んくっ！」

舌を絡ませられ、吸われ、いやらしく蠢かせてくる。こんな大人のキスは初めてだつた。

いつもの菜緒なら、親しくない男性に強引に口づけをされたら、絶対に拒んでいる。でも相手が柊生となると、何故か嫌悪感はなかつた。抱きしめられる腕の力、体躯から発散される熱に酔わされていく。

もつと、もつと深いキスをして——そう請い願つた時、キスは唐突に終わりを迎えた。唾液で濡れた唇に冷気が触れ、ぞくぞくした感触を引き起こされる。

「……さあ、行こう。俺たちの夜が始まる」

柊生に促されるものの、足が別物になつたようで動かない。今までどうやつて歩いていたのかと戸惑うほどだ。

菜緒は柊生に腰を支えられて部屋に入った。彼は後ろ手でガラスドアを閉めると、そこでやつと、菜緒に触れていた手を脇へ下ろした。続けて、彼は遮光カーテンを乱暴に引き、外の灯りを遮断する。

菜緒は部屋の真ん中に立ち、口づけでぴりぴりする唇に触れながら瞼を閉じた。

どうして柊生とキスをする流れになつたのか思い出せない。でも彼の傍にいると、これまでにはいほど心が躍り、心臓が凄い速さでリズムを刻んでいく。パニックで目が回りそうだ。

早く気持ちを落ち着けて、自分を取り戻さなければ……

菜緒は深呼吸して目を開け、暗闇に包まれた部屋を見回した。

「あっ、電気を点けなきや……」

柊生の傍を離れて電気のスイッチを入れようとするが、動き出す前に柊生に手首を掴まれた。

「電気は点けなくていい。いや、そうだな、間接照明にしてくれないか？」

「ど、どうして、間接照明なんですか？」

顔の見えない柊生を振り仰ぐ菜緒に、柊生が氣怠げに大きなため息をついた。

「一人暮らしの女性の家に恋人が来てる。しかも深夜にだ。これから恋人同士が仲良くしようつて時に、煌々とした灯りを点けるのは不自然だろ？ 薄暗い部屋にしておけば、俺たちがいい雰囲気になつていると律子の彼氏も思うはずだ」

「あつ、なるほど……。そういうことなんですね」

菜緒の頬は、羞恥で染まつた。柊生の言わんとする意味を、やつと察することができた。

それは、男女がベッドで愛を確かめる行為……

裸になつた菜緒と柊生が軀を重ねて、激しく互いを欲する光景が脳裏に浮かぶ。それを消すように、菜緒は激しく首を横に振つた。

「……じゃ、あの、間接照明にしますね」

声が上擦るのを隠せないまま、菜緒はゆっくり壁際へ歩き、間接照明のスイッチを押した。ぽんやりとしたオレンジ色の灯りが天井に反射して、温もりのある空間に包み込まれる。

いつもなら暖色系の灯りに包まれて、リンパケアや柔軟体操をしてリラックスした時間を過ごすが、この状況は勝手が違う。男性を入れた経験のない部屋に、初対面でありながら唇を許した柊生がいるからだろう。彼と二人きりだと思うと、菜緒は自然と身震いした。でもそれは怖さというよりも、彼と同じ空間にいられる喜びのようなもの。

ああ、もつと柊生さんことを深く知りたい——高鳴る胸に手を置き、速まる鼓動音に耳を傾ける。しばらくじっとしていたが、気持ちが落ち着いてくると肩越しに振り返つた。菜緒に面を向けている柊生に微笑みかける。

「ソファがなくてすみません。好きなところに座つていてください。あの、お酒は……もういいですかね？ 日本酒を結構いただきました。……お茶、淹れますね」

「大丈夫か？ あまり見えてないんだろ？ 僕も手伝おうか？」

キッチンへ向かう菜緒に、柊生が心配げに声をかける。

「いえ、大丈夫です。自分の部屋で過ごす時はほとんど裸眼ですから」

そう返事してから、菜緒はいそいそと動き、電気ポットに水を入れてスイッチを押した。食後なのでほうじ茶がいいと考え、急須や湯のみを取り出す。お茶請けとして、以前仕事で知り合つた方の店で購入した塩こんぶを小皿に添える。準備を終えて振り返ると、彼がベランダへ通じるガラスドアを閉めていた。

「どうかしましたか？」

「ダウンジャケットと籠を、ベランダに置きつ放しだったからさ」

カーテンをもとに戻す柊生の後ろ姿を、ぼんやりと眺める。セーター越しでもわかる、彼の強靭さと、無駄な贅肉のない体躯。あの広い背中に手を回して彼を抱きしめたのを思い返すだけで、また菜緒の心臓が早鐘を打ち始めた。

「……おい、どうした？」

いつの間にか振り返つていた柊生が、ゆっくり菜緒の方へ歩き出す。

「あっ、いえ！ なんでもないです。どうぞ座つてください」

柊生をうつとり眺めていたのを見られてしまった。菜緒はどうまぎして俯きつつ、ローテーブルにほうじ茶を淹れた湯のみとお茶請けを置いた。彼はダウンジャケットと籠を脇へ置き、テーブルの傍に腰を下ろす。

「いただくよ」

柊生が湯のみを持ち、ほうじ茶を啜る。

「うん、美味しい。それに、お茶請けに塩こんぶか。ハハツ、どれだけクライアントと仲良く——」「はい？……仲良く、ですか？」

柊生の言つている意味を理解できず、訊ね返す。すると、彼が慌てた様子で頭を振った。

「いや、なんでもない。それより、律子が眼鏡を壊したんだよな？ 予備はないのか？」

「はい。でも普段は……コントакトを使つてるので、支障はないですよ。仕事の合間を見て買いに行つてきます」

「……俺も付き合おう」

付き合う？

菜緒は目を見開いた。大丈夫だと強く頭を振り、顔の前で手を振る。

「い、いいですよ！ 一人で行けます！」

拒まると、余計に一緒に行きたくなるんだけど

險のある声音に驚き、菜緒は目をぱちくりさせた。

「あの！ えつと……ごめんなさい。でも、本当に大丈夫です」

一步近づこうとする男性から、また逃げ出す。本当は柊生の方へ踏み込んでみたい気になつているのに、ここぞというところで自分で線を引いてしまう。

菜緒は、情けない自分の性格に呆れてため息をついた。

「まるで警戒心の強い仔猫だな。……俺に何かを言いたいような顔をするくせに、俺が近づこうと

すれば、毛を逆立ててさつと逃げる」

「そ、そんなことないです」

否定はするものの、柊生の意を射た言葉に、菜緒は居心地が悪くなつてきた。もぞもぞ動き、目の前の湯のみに視線を落とす。

「何？ 図星を指されて腹が立つたか？」

「そういう言い方、失礼ですよ！」

ずけずけ物を言う柊生に、菜緒は立ち上がりつて感情的に声を荒らげた。そこで初めて、男性に突つかかつた自分に気付いて息を呑む。

「す、すみません！ わたし……そういうつもりでは——」

不規則なリズムで打ち始める心臓に痛みが走る。菜緒は苦しくなつて瞼をギュッと閉じ唇を引き結んだ。部屋はシーンと静まり、いつ柊生が怒鳴り返してもおかしくない空気に包まれていく。だが聞こえてきたのは、柊生の笑い声だった。

「大人しい性格なんだと思っていたが、きちんと自分の気持ちを言える女だつたんだな。律子のことで俺に突つかかつてきた時はびっくりしたが、それが菜緒の素の姿か。すっかり騙されたよ」

おかしそうに笑う柊生の聲音に、菜緒を咎める色はなかつた。

「怒つていない？ それどころか面白がつていい？」

「こういう展開になるなんてな。あの時、ヤバイなと思ったのに……」

「菜緒……、さつきはキスして悪かつたな」

突然キスの話をされて、菜緒の下腹部奥がキュッと締め付けられた。生まれた熱がじんわりと波状に広がる感覚に、腰が抜けそうになる。

「い、いえ……。あの時の流れでは、仕方ないとわかつています。まあ、その……酔つて交わしたもの……キスだと思つたらいいわけですし」

今の言葉は嘘だ。菜緒は酔つた勢いで、誰かれ構わずキスなんてしない。場を盛り下げるにわかっていても、キスを織り交ぜたゲームが始まつたらそっと退席するのが常だつた。遊びで簡単に唇を許したり、抱擁したりは決してない。でも、それを言えば彼は気にするだろう。なんでもないと大人ぶつて肩をすくめるのが一番いい。

そう思うのに、柊生がキスの話をしたため、菜緒の唇はそこが第一の心臓になつたかのようにずきずきと疼き始めた。菜緒が夢見ていた出会いではないはずなのに、心が彼に囚われていく。

「ふうん、菜緒の心は、あのキスでは動かなかつたわけだ……」

「いえ、その逆です。あんなキスは初めてで、わたし——」  
菜緒はそこでハツとして口を噤む。柊生の言葉に対し、心中で思つたことを素直に口に出していだ。顔が羞恥で熱くなつっていく。

「ち、違つ！」

激しく頭を振るが、足の踏ん張りが利かない。柊生とのキスを思い出して、腰が抜けそうになつていたのをすっかり忘れていた。

「あつ！」

足を横に出して体勢を整えようとしたが、踏み出した場所が悪かつた。そこにある柊生のダウンドヤケットを踏みつけて、足元を取られる。

「キヤツ！」

「お、おい！」

菜緒はつるつと滑り、両腕を開いた柊生の胸に思い切り飛び込んでしまう。軀に衝撃が走るが、彼が後ろに倒れながら抱きとめてくれたお陰で大事には至らなかつた。

「すみ……ません！」

安堵の息をついて軀を起こそうとするが、背に回された柊生の手に力が込められて身動きできなくなる。

「あの、柊生さん？」

「あまり驚かさないでくれ」

柊生はかすれた声で囁き、さらに菜緒を強く抱きしめて肩に顔を埋めてきた。菜緒の慌てぶりを笑うか、それとも危ないと怒鳴られるか、そのどちらかだと思つていただけに、拍子抜けしそうになる。

「えつと……」

戸惑いを隠せないまま柊生に声をかけた時、彼のムスク系の香りがふわっと漂つてきた。鼻腔をたくだらかに開いたまま、鼻腔をくすぐる男らしい香りを胸いっぱいに吸い込むだけで、菜緒の軀は歓喜に包まれていく。幸せな温

もりは四肢の先まで広がつていった。

柊生にずっと抱かれていたいという思いに駆られたが、菜緒の全体重をかけられた彼は苦しいに違いない。菜緒はフローリングに手をつけ、彼の抱きしめる力に反発して上体をほんの少しだけ上げた。

「わたしは大丈夫です。柊生さんが抱きとめてくれたお陰で、どこも痛く……あつ！ 柊さんは大丈夫ですか？ 頭、打つていません!?」

柊生の顔を覗き込む。これぐらい近ければ彼の目を見られるが、菜緒の影に入る彼の顔はよく見えなかつた。不機嫌そうにしているのか、笑つているのか、それさえもわからない。

菜緒はそつと手を伸ばして、彼の肩口に触れた。

「……痛いところはありませんか？」

「俺はどこも怪我はしてない。それより、俺の意識は菜緒の……柔らかい胸にいつてる。とても気持ちがいい」

「む、胸!?」

柊生の胸板で濡れている乳房に気付き、取り乱して離れようとする。だが、彼は菜緒の背中に触れる手をわずかに上へ移動し、動きを制した。もう一方の手は菜緒の後頭部に触れ、逃がさないとばかりに力が込められる。

「柊生さん！」

「さつき、俺とのキスは酔つて交わすのと同じだと言つたが、酔えば簡単に男に唇を許すの

か？ ……今日の合コンでも、見知らない男としてきたつてわけか？」

「いいえ！」

柊生の言葉に感情的になつて、声を上げてしまう。そんな態度で彼に突つかかつてしまつた事実に戸惑い、菜緒は自然と彼の目から逃げた。

「そういう意味で言つたのでは——」

「じゃ、どういう意味？」

柊生は後頭部に触れていた手を動かし、口籠くちごる菜緒の頬を親指で撫でた。静かな部屋で起こる親密な触れ合いに心臓が高鳴り、互いの息遣いや弾む拍動に意識が向いて口が重くなる。

菜緒は緊張に耐え切れず顔を背そむけようとするが、それは許さないとばかりに強く抱きしめられた。柊生の胸元へ乳房を押し付ける姿勢に、息苦しさがどんどん増していく。

「逃げるな。君は、すぐに顔を背けて逃げようとする。構つて欲しいくせに、ほんの少し俺が攻めれば爪を立ててそっぽを向くよな。本当、気まぐれな仔猫ねこねこだ」

人の心を惑わす低い声で囁かれるだけで、言葉の一つ一つが、とてもエロティックなものに聞こえてくる。そのせいで、菜緒の脳の奥に熱が溜まつていき、ボーッとしてきた。

「わたし、別に気まぐれというわけではない」

舌が乾いて上手く言葉を紡げない。それでも信じて欲しいと、菜緒はよく見えない柊生の顔に目を向けた。

「食いつくのはそこ？ ……やっぱり、俺の知る女たちと違つて調子が狂うな。それがまたいいと

いうか……。クソツ、律子にしてやられた感に凄いムカつく。でも、律子だけが悪いんじゃないだよな。俺の興味ばかりを惹く、お前が悪い」

何もしていらないのに菜緒が悪いみたいな言い方をされて、一瞬ムツとする。だが、それさえも終生の笑いを誘う。

「何故笑うんですか！」

菜緒は身じろぎして、柊生から離れようとする。その時になつて初めて、下腹部にあたる硬い感触に気付いた。その意味がわかつた途端、柊生の昂ぶりが触れたそこが火がついたのではと思うほど熱くなつていった。動きたいのに、彼を刺激すると思うと動けない。どうしようと考えれば考えるほど躯が強張り、呼気の間隔がどんどん狭まる。零れる吐息も、湿り気を帯びてきた。

「……そういう反応も、また新鮮だ」

柊生は菜緒の頬に触れていた指を動かし、浅くなつた息を零す唇に沿わせる。

「なあ、まだ答えを聞いていないんだけど？……酔うと男に唇を許すのか？ 演技なら、誰にでもキスするのか？ 男の背に手を回して抱き寄せるのか？」

「わ、わたしは……」

菜緒はなんと言えばいいのかわからず、口籠もつた。大人の女性らしく、キスなんてどうつてことないと言いたいのに、逆に節操のない女性だとも思われたくなかつた。

いつたいどうすればいいのだろう。

「菜緒？」

菜緒はハッとして、柊生を窺つた。彼が何を考えているのかはわからない。だが、彼に愛しげに名前を呼ばれると、嘘をつくのではなく、正直な思いを伝えたいという感情が込み上げてきた。

「なんとも思つていい男とキスをするのかしないのか、どっちだ？」  
早鐘を打つ心音で息が弾み、菜緒は上手く声を出せないでいた。きちんと話せるか不安もあつたが、なんとか気持ちを伝えようと声を絞り出す。

「……しません。酔つて気分が高揚したとしても、わたしは……誰とでもキスする女じやありますせん」

「じゃ、何故俺には許した？ 律子を助けるために……仕方なく受け入れたのか？」

「いいえ！ ……あの、もちろん最初はびっくりしました。ただわたしは、律子さんを助けるためであつても、その場のノリでキスはしません」

「……なら、どうして？ 俺に唇を奪われても、舌を入れられても、菜緒は拒まなかつた」

柊生の柔らかくて、日本酒のフルーティな香りが残る舌を差し込まれた感触が甦つてきた。菜緒の顔に血が集中して、火が出そうなほど火照つてくる。

「俺の籠がはずれたつて、途中でわかつただろ？ それでも嫌がらず受け入れたつてことは、菜緒の気持ちが俺に向いていると思つていいのか？ 唇を塞がれてもいいと思うほどに？」

「そ、それは——」

菜緒は深呼吸し、柊生の形のいい唇に視線を落とす。その時、もう一度彼と口づけを交わしたいと自らが願つてゐることに気付いた。菜緒はうつとりと瞼を閉じる。

「……はい」

想いを正直に認めた途端、菜緒の心臓が早鐘を打ち始めた。軀の奥深くが燃え、彼への想いが膨れ上がっていく。甘いうねりが軀を包み込む心地よさに、そっと目を開けた。菜緒の後頭部に添えられた格生の手に力が込められ、引き寄せられる。そして二人の湿った吐息が、唇の上でまじり合う。

「……つあ」

小さな声を漏らした時、菜緒は彼に唇を塞がれた。唇を開けろと舌で舐められ、我慢できなくなつて開くと、彼の舌がぬるつと口腔に差し入れられた。歯列をなぞられ、舌を絡められ、上頸の裏を舐められる。巧みな舌の動きに抗えず、菜緒はされるがまま受け入れた。

「つんう……んふあ」

格生を誘う声が漏れる。あまりにも激しい彼の求めにくらくらしてきた。だが意識は、大きく硬くなつて菜緒の下腹部を突く彼のシンボルに向けられる。それを生かした行為に移りたいと、彼が擦り付けてくる。さらに、彼の武骨な手は、我が物顔で菜緒の衣服の上を這い回つた。そのたびに菜緒の軀の芯は焦げるような疼きに見舞われ、キスが深くなればなるほど手足の力が抜けていった。

「あ……んんっ！」

「菜緒つ……」

口づけの合間に、何度も名前を呼ばれる。菜緒は格生に求められる幸せに酔い、いつしか冷静な判断ができなくなつていった。感じるのは、菜緒を貪り尽くす勢いの口づけ、軀を這う愛撫、そし

てさらに先を望み押し付けられる彼の昂ぶりだけになつていく。

「あ、はつ……んう」

格生の手が、菜緒のセーターの裾を捲り上げ、シャツの中に忍んできた。冷たい手が柔肌をまさぐる感触にハツとなるものの、気付いた時には簡単にブラジャーのホックをはずさせていた。あまりの手際の良さに驚いて逃げようとするが、いつも簡単に彼に組み敷かれてしまう。彼は菜緒のスカートが乱れていても気にせず双脚を両膝で挟み込み、身動きできないように体重をかけて上体を起こす。

「ああ、とても綺麗だ！」

格生の手で乱されたセーターとシャツは捲り上がり、胸が露になつていた。彼の目がそこに釘付けになつていると感じ、片腕で隠そうとする。そうする前に彼の両手が伸び、柔らかな乳白色の乳房を驚きにさせた。弾力を確かめては揉み、揺すり、硬く尖った乳首を指の腹で捏ねくり回す。

「あっ、い、イヤ……」

自分の乳房をまさぐる格生の手の甲を、菜緒は咄嗟に掴んだ。その拒みも意に介さず、彼は急に上体を前へ倒して菜緒の唇を塞ぐ。巧みな舌使いで簡単にこじ開けられ、口腔を侵される。いやらしい動きで濡れた舌を絡めては、菜緒の乳房を揉みしだいた。軽く腰を上下に動かし、ズボンの生地を押し上げる硬く漲った怒張を、パンティ越しに擦り付けてくる。意味深な動きが何を求めているのかわかると、菜緒の秘所が充血し、彼を受け入れようと戦慄き始めた。

「つんあ……は……あ！」

菜緒は柊生の手の甲に爪を立て、送り込まれる快い刺激に軀をしならせた。それが、菜緒を正気に戻した。セックスの経験があれば別かもしれないが、まだ一度もないからこそ、高まつた興奮に流されてはいけないと自分を戒める声が頭の中で響く。

頭を左右に動かして、柊生のキスから逃れる。再び唇を塞がれる前に、菜緒は「ま、待つてください」とかすれた声で懇願した。だが、彼に頸を掴まれ、顔を上げろと促される。

「あのさ、……逃げても俺は追いかけるよ？」駆け引きを仕掛けてきたのはいつたい誰なのか、それを忘れてもらつては困る。いいか、俺のスイッチを入れたのは君だ」「ごめんなさい。そういうつもりではなくて……」

菜緒は捲り上げられたセーターを下ろして胸を隠し、そつと柊生を仰ぐ。

ここまで柊生を受け入れておきながら途中で拒むなんて、菜緒自身酷いことをしているとわかつている。でも、どうしてこの先へは進められない。

「だ、だつて……、数時間前に会つたばかりなんですよ。すぐに軀を重ねられません！」

まだ情熱が燃つてゐるせいで声がかすれたが、菜緒は素直に自分の気持ちを告げた。柊生が菜緒をじっと見下ろす。彼の顔がはつきり見えないので何を考えているのかわからない。それでも菜緒は、勇気を振り絞つて彼に詰め寄つた。

「柊生さん、わかつてますか？ わたしをどう想つてくれているのか、まだ何も言つてくれてないんですよ？」それに、わたしだつて柊生さんのことあまり知らないですし……」

その場の勢いだけで、わたしの初めてを捧げられないんです！ ——言えない言葉を目に宿して、

柊生を見上げる。

「……そういうふう……、そつと、な」

柊生はしみじみと言い、何かを考え込み始めた。しばらくして彼は菜緒の手を掴み、上体を引っ張り起こしてくれた。彼の行動が読めず、菜緒は戸惑いながら彼を窺う。

確かに先ほどまであつた、菜緒を欲しいという柊生の欲望。それが、蠟燭の火を吹き消したみたいになくなつていた。それだけではない。彼は菜緒の傍を離れ、ダウンジャケットを拾つて立ち上がる。

「あ、……あの？」  
この展開に頭が追いつかず、菜緒は恐る恐る柊生に呼びかけた。  
「君の言うとおりだ」

「えっ？」

柊生が振り返り、菜緒を見下ろす。

「事を急ぎ過ぎるのは良くないと言つたんだ。確かに……君は俺をまったく知ろうとはしないし、気付こうともしない」

「……あの、何を、ですか？」

柊生に続いて立ち上がりがろうと、フローリングの床に手をつく。なのに足腰に力が入らない。立つのを諦めた菜緒は、柊生を見上げた。

「俺がここまで誰かの気持ちを尊重するなんて、焼きが回つたか。だけど、そういう風にさせられるのも……うん、悪くはないな」

柊生が菜緒に数歩で近づき、ゆっくり前屈みになつて顔を近づけてきた。これまでとは違ひ、間接照明の灯りが彼の面を照らす。ぼんやりとした輪郭が徐々に濃くなり、彼の顔が浮かび上がる。精悍な相貌に心臓がドキンと高鳴ると同時に、唇を塞がれた。これまでの激しいものとは違う優しさ。それは、キスで膨れ上がつた菜緒の唇をついばんでは舐める。そうされるだけで背筋に疼きが走り、硬く尖つた乳首がセーターの毛糸に擦れて痛みを感じた。

「……っんう！」

喉の奥で呻き声を漏らすと、柊生が口づけを止めた。いつの間にか閉じていた瞼をゆっくり開けると、彼はもう菜緒に背を向けて歩いていた。

「しゅ、柊生——」

「俺は、菜緒と違つてもう三十代だ。学生みたいに、好きだの嫌いだのと言つた言葉を囁く恋愛はもうできない、そう思つていた。なのに、なんでこう調子が狂うんだろう。……振り回されるのも悪くなつて思うほど、俺は君の虜になつてる」

それつて、わたしを好きつて意味ですか!? —— そう言おうとしたが、柊生が肩越しに振り返つて微笑んだため、菜緒は言葉を呑み込んだ。

「じゃ、また明日な……高遠さん」

柊生が廊下へとつながるドアを開けて、姿を消す。やがて、玄関ドアが開く音、続いてオートロックの鍵がかかる音が聞こえた。部屋はシーンと静まり返るが、菜緒はまだ正気に戻らなかつた。だが、ふらつきながらも立ち上がり、窓辺へ寄つてカーテンを開ける。

マンションの表玄関を見下ろしていると、やがてそこに一つの人影が現れた。黒い塊が動いているとしかわからないが、菜緒にはそのぼんやりとした影が柊生だとわかつた。

「……そういえば、明日つてどういう意味?」

出ていく間際に放つた柊生の言葉が、今ごろになつて頭の中でぐるぐる渦巻く。他にも何かが気になるのに、それがなんなのかわからない。心の奥がざわついて、痛みまで出てきた。胸に手を置き、心臓を握るようにセーターを握り締める。

菜緒は黒い塊が暗闇と同化するまで、じつと彼を見ていた。

二

——翌日。

インテリアデザイン会社のコントラクト事業部に所属している菜緒は、商談のため、仕事上でペアを組んでいる課長補佐の榎原とシティホテルのラウンジに来ていた。

コントラクト事業部の仕事を、社内にある内装設計事業部が請け負つてゐる仕事を確認するところから始まる。そして、内装に統いて空間デザインの契約も取るために、クライアントと商談を重ねる。契約を取れて初めて、仕事に成功したことになるのだ。顧客とのやり取りは大変だが、菜緒は自分の仕事にやりがいを感じている。今回も、菜緒たちは内装設計を終えているクライアントに接触してゐた。

二人の前には、栃木県那須岳の麓で老舗旅館、彩郷荘を営む社長と専務が座っている。彼らは広げた資料ファイルを見ては、腕を組んでうなり声を上げていた。

「うーん、あなたたちの言い分もわかるんだけどね……、室内雑貨などは女将や若女将が既に目ぼしいものをチェックしているんですよ」

社長は渋い顔をしつつも、現在リノベーション中の内装に合わせて提案されたデザイン画に、目を奪っていた。

「そうですよね。すぐに答えなんて出ないですよね」

桧原が、神妙な聲音でクライアントの気持ちに同調する。菜緒は手元の資料を見ながら、ちらりと横に座る上司を窺つた。外見で人を判断するわけではないが、つくづくもう少しだけ身だしなみを整えたらいいのと思つてしまふ。

だからといって、小汚いわけではない。桧原の肌は三十代の男性にしては綺麗だし、髪型も丁寧なデザインカットをしている。ただ、お洒落感がまつたくなく、とても地味だった。黒縁フレームの眼鏡は、男性を理知的に見せるアイテムにもなり得るはずなのに、何故か彼がかけるともつさりとしたイメージになる。そんな姿だから、普通に笑つても頼りなく見え、誰が見ても契約を取る職には向いていないと思われていた。

ところが、桧原のコントラクト事業部での成績は、飛び抜けて良かった。数年前に転職してきた彼は、コントラクト事業部に配属されるなり業績を上げ、二十代後半に課長補佐となる。菜緒が彼とペアを組むことになったのは、一年前の春。当然、尊敬する上司と組めることに舞い上がつた。

彼から得られるものは、なんでも盗む。その意氣で必死に彼についていっているが、今もまだ彼の何が凄いのか、よくわからなかつた。

とはいって、上司とペアを組んで見てきたことはある。彼は物腰柔らかな態度と、相手を威圧しない朗らかな笑みで、難しい契約であるにもかかわらず、相手に判を押させてしまうのだ。だが、そこに契約のスペシャリストを連想させるものは何もない。それなのに、彼の成績は部署内で常にトップ。本当に凄い上司だ。

「……そう思いませんか、高遠さん？」

自分の名を呼ばれて、菜緒は我に返つた。六十代の社長と、その息子の専務が菜緒を見て、返事を待つている。

今、何の話をしていたの!?

内心あたふたしていると、桧原がクライアントに渡したデザイン画のコピーの一部分を指した。

「ここね、壁紙の一面にだけ暗い色を持つてきているよね？ それでなくとも部屋が暗く見えるのに、どうして雑貨にも暗い色を持つてくるのかとおっしゃっているんだ。部屋が暗くならないかと心配されているんだよ。高遠さんが、その疑問に答えて差し上げなさい」

インテリアデザイナーの肩書きを持つ君の力を、ここで発揮しなさい——そう言わんばかりに桧原に促されて、菜緒は背筋をピンッと伸ばした。

「これは、目の錯覚でお部屋を広く見せる手法なんです。たとえば——」

白を基調とした雑貨は、確かに部屋を清潔に見せてくれるし、明るくしてくれる。但し、膨張色

でもあるので、主張し過ぎてしまう傾向がある。そうなると、余計に目の端<sup>は</sup>に入りやすくなり、心を落ち着かなくさせるのだ。また、彩郷を訪れる客層は、年配の夫婦と、特別な時間を過ごすカップルが主だ。何故シティホテルではなく、老舗旅館を訪れるのかを考えた場合、その目的は安らぎだろう。ならば客の求める空間を提供することを第一に考えた方がいい。

「なるほど……。若女将<sup>おかみ</sup>は、白色で統一して清潔感を出したいと言っていたが、高遠さんが説明してくれたように、こちらの方が……年配のご夫婦は落ち着いた時間を過ごせるかもしれないな」社長と専務は、先ほどとはまた違う目でデザイン画に集中し始める。しばらく二人が話し込むのを黙つて聞いていたが、桧原が手元の手帳を開き、スケジュールに指を走らせた。

その時、桧原の手の甲にある引っかき傷が目に入った。

爪でつけられた、痕<sup>あと</sup>?

どうしてそんなところにできたのかと小首を傾げる菜緒の隣で、桧原は難しそうな顔をする。だが彼は早々に手帳を閉じ、クライアントの方へ意識を向いた。

「確かに、明後日には戻られるんですね。明日の夜、よろしければ夕食をご一緒にいかがでしようか? そこで今回のお返事をいただけませんか? 申し訳ないのですが、実は彩郷さまの春オーブンに間に合わせるには、ここ数日で契約を結ばせていただきないと、時間的にかなり難しくなるんです。もちろん女将や若女将のご意見も伺つて柔軟に対応しますので……」

桧原が申し訳なさそうに伝えると、社長は力強く頷いた。

「そうだね。私も時間に余裕がないのはわかっている。これまで何度も足を運ばせてしまつて悪

かつたね。しかも契約するかどうかはわからないのに、彩郷のイメージに合うデザイン画を何枚も用意してくれた。ありがとう、桧原さん」

社長は隣に座る専務に「では、あとは私たちで話を詰めよう」と言い、席を立つた。桧原に続いて菜緒も立ち上がる。

「明日、いいお返事をいただけるのを楽しみにしています」

にこやかに微笑む桧原と社長が挨拶<sup>あいさつ</sup>を交わし、彼らとはラウンジで別れた。

菜緒は、桧原と一緒にエントランスへ向かった。外へ出る直前に立ち止まり、腕にかけていたコートを羽織つて外へ出る。

瞬間、冷たい風が吹き込んで素肌を撫でていった。

「ひやあ、寒い!」

菜緒は背の高い桧原を見上げ、感謝を込めて頬を緩めた。  
「いいえ、気にしないでください。僕の大切な部下に風邪をひかれたら困りますしね」  
優しげににこりとする桧原は前を向き、ホテルの敷地を出て近くの駅へ向かう。菜緒は、歩幅を含ませて歩いてくれる彼の横顔をこつそり窺つた。

「ありがとうございます」

菜緒は背の高い桧原を見上げ、感謝を込めて頬を緩めた。

「いいえ、気にしないでください。僕の大切な部下に風邪をひかれたら困りますしね」  
優しげににこりとする桧原は前を向き、ホテルの敷地を出て近くの駅へ向かう。菜緒は、歩幅を含ませて歩いてくれる彼の横顔をこつそり窺つた。

長い髪の毛が、目元を隠すように眼鏡のレンズにかかっている。もう少し前髪を短くするか、整髪料で髪に動きを出して肌色の面積を広げれば、暗いイメージも払拭されるだろう。太くて大きなネクタイの結び目を小さくすれば、野暮ったい印象もがらりと良くなるに違いない。でも彼はお洒落には無頓着だ。それが本当に残念でならなかつた。

「高遠さん？ 明日の夜は、接待です。必ず空けておいてくださいね」

「は、はい！」

盗み見していたのがバレたのだろうか。菜緒にちらりと向ける桧原の目は、部下が何を考えて上司を見ていたのかお見通しだと言わんばかりだ。菜緒が口籠もつた途端、彼の口元がふつとほろこぶ。それを見て、菜緒は天を仰ぎたくなつた。だがそんな菜緒の隣にいる彼は、一切個人的なことは口にせず真正面を向いた。

「このあとはアポは入っていないので、真っすぐ会社へ戻りましょう。少し遅めの昼休みを取つたあとは、彩郷の空間設計事業部の担当者と会い、調整の準備に入ります。明日の契約は取れると思うのでね」

「えっ？ 取れると思うんですか？」

「誰に言っていますか？」

突然桧原が流し目で菜緒を見てくる。今まで彼がそんな風に菜緒を見たことはなかつた。上司の目つきに思わずドキッとして、さつと顔を背ける。

「な、何!? 今の！ ——心の中であたふたするが、桧原の目は笑っていた。今日の商談に手応えある。

を感じて、高揚しているだけに違いない。いつたい自分は何を勘違いしているんだろう。

「すみません、わたしが間違つていました。そうですよね、桧原さんが取れると思った契約を逃すなんてあり得ないのに……」

菜緒は申し訳なく思いながら顔を上げた。そして、信頼の情を伝えるように微笑む。その途端、彼が息を呑んで目を見開き、まじまじと菜緒の顔を見つめてきた。

「あの、どうかなさいましたか？」

「いや……あ、いえ、別に、なんでもありません」

桧原は手で口元を覆い、さつと目を逸らす。また、彼の手の甲にできた赤い筋が目に飛び込んできた。ラウンジで見た時よりも、ぷつくり膨らんでいるのがわかる。身だしなみに無頓着な桧原が消毒しているはずがない。会社へ戻つたら、彼の手当てをしよう。救急箱くらい、部署内に置いてある。

菜緒は桧原と一緒に電車を乗り継いで、会社へ戻つた。

部長の呼び出しで桧原が席をはずしている間に、菜緒は遅めの昼食を取り、コントラクト事業部に戻ってきた。

「あつ、皆……まだ帰つてきていらないんだ」

部署には誰もおらず、部屋はシーンと静まり返つている。

菜緒は入り口に立てかけられたホワイトボードを見て、他のメンバーの仕事状況を確認した。建売住宅展示会回りや、現在交渉中のクライアントのどころへ行くなどで、皆、直帰マーケがついてある。

いる。

終業までの残り数時間は、桧原と二人きりか……

尊敬する上司と二人きりになったことは、これまでに何回もある。仕事もしやすく、緊張を覚えたことは一度もないのに、今日に限つて妙にそわそわする。先ほどの帰り際に見せた、桧原らしくない流し目に影響を受けているのかもしれない。

これも昨夜、柊生と出会つて身も心も敏感になつてゐるせいだろう。耳元で聞こえた彼の吐息、軽く触れてきた手の感触を思い出すだけで、自然と熱が生まれて動悸<sup>どうき</sup>が激しくなる。

「ダメダメッ！」

菜緒は激しく頭を振つて、ボヤけた柊生の面影を振り払い、自分の席に座つた。

「……うん？」

キーボードにメモ用紙が挟まれている。手に取つて伝言を読むが、内容が頭に浸透するにつれて顔が真っ赤になり、手足にまで熱が広がつていつた。恥ずかしさのあまり、それを手のひらの中でもくしゃくしゃにしてしまう。

メモには、じゅうせい様からTEL有り。また連絡する。……とのこと」と書いてあつた。彼は菜緒の勤め先を知らない。だが、こうして電話をかけてきたということは、五十嵐に菜緒の勤め先を訊いたのだろう。そして彼は、自分で電話番号を調べたのだ。彼の本気度が伝わってきた。昨夜言つていた“明日会おう”という言葉に偽りはなかつたのだ。

菜緒は柊生の従姉<sup>いいじい</sup>を思う優しさや、困難が降りかかるつても前を向く姿勢に惹かれた。その彼とも

う一度会えるかもしれないと思つただけ、胸が躍<sup>おど</sup>るのを止められない。

「ああ、どうしよう……！」

「何をしているんですか？」

突然頭上から優しい声が降つてきた。菜緒がハツと我に返つて顔を上げると、そこには桧原がいた。

「疲れましたか？」

「あっ、いえ！ ……少し、ボーッとしてしまつて……」

誰もいなかつたとはいえ、仕事中に柊生との関係に思いを馳<sup>は</sup>せるなんて何をしているのだろう。

菜緒は手にしたメモ用紙をさらに強く握り締めた。

「それは？」

手の中のメモ用紙を指されて、慌てて傍らのゴミ箱に放り投げた。

「……あっ、別になんでもありません」

「ふうーん」

桧原はそう言つた直後、背を向けて自分の席へ向かう。だが菜緒は、彼のいつもと違つ低い聲音に驚き、広い背を目で追つた。

今のは、本当に桧原の声？ 菜緒の知るアルトがかつた優しい声色とは全然違う。

「どうかしましたか？ 高遠さん？」

席に座つた桧原が、菜緒に声をかける。その聲音は聞き慣れたもので、いつもと変わらなかつた。